

最先端の研究者こそ日本語力を磨いて表現の質を高めるべき

～人を共感させる日本語には科学的根拠を超える力がある～

株式会社ユーグレナ

代表取締役社長 出雲 充氏



出雲 充 社長

2005年、株式会社ユーグレナは、世界で初めて59種類の栄養素を含むミドリムシ（学名：ユーグレナ）の屋外大量培養に成功した。現在では、『ユーグレナ・ファームの緑汁』をはじめとする機能性食品、化粧品、二酸化炭素削減技術、飼料関連など「炭素循環社会」を軸に据えた事業を展開している。さらに、次世代燃料として期待される「ユーグレナ由来のバイオ燃料化」が実現すれば、世界中の注目を集めるだろう。誰も成し得なかった道を切り開き、ミドリムシの商品化という新たな着想を具現化させた代表取締役社長の出雲 充氏にお話を伺った。

多くの人々に思いを伝えるには、

科学的な正しさと共感力が不可欠

“健康を維持するために、ミドリムシがどんなに素晴らしいかを懸命に伝えても伝わらない。なぜだろう？”。長年この問題に悩まされてきた出雲氏だが、最近になって、ようやく多くの人々に、その思いが届き始めたと言っているという。何が変わったのだろうか。

「ミドリムシのことを“ムシなんじゃないか”と思っている人がいたとしても、科学的に信頼できる根拠を正しくお伝えすれば、時間とともに誤解がとけて“ミドリムシは健康にとって有効なものだ”と、共感していただけたと思っていました。ところが、『サイエンティフィカリーコレクト（科学的には正しい）』と、多くの人の心をつかみ応援してもらうこととの間には、大きな隔りがあることを痛感しました」

科学的根拠だけでは共感が得られないとすれば、一体どうすれば良いのか。答えを見つけたのは、バングラデシュ。栄養失調の子供たちの体を、ミドリムシで改善できることを理解してもらうために続けた対話だった。ちなみに、バングラデシュは出雲氏の人生を変えた地。人生で初めて訪れた際、当時18歳だった出雲氏は、貧困や飢餓で苦しむ人々を目の当たりにし、彼らを救いたいという想いに突き動かされてからミドリムシと出会い、研究を始めたという。

「私たち以前にも、欧米をはじめ多くの食品会社が栄養失調問題を改善するプログラムの提案をしていますが、どのプログラムもさほど定着しませんでした。そこで、私たちは定着しない理由に着目し検証を始めました。すると、“栄養価の優れた商品として科学的に証明されているものだから食べなさい”と一方的に送られてくるだけで、どんな食材を使用しているのか、どういう製法なのか、そして作った人の顔が見えないという実態にたどり着いたのです。

そこで、私は定期的に現地に赴いて大勢の子供たちと接し、ユーグレナ入り食品を手渡ししながら“元気になった？”と声をかけたり、ミドリムシのことや栄養失調問題へ関心をもった理由などを語り続けました。こうしたコミュニケーションは栄養失調を治す直接的な打開策にはなりませんが、子供たちの気持ちに寄り添った言葉で話をしていくうちに、彼らも耳を傾けてくれるようになります。次第に、学校の先生や親も興味を示してくれるようになります。こうして多くの人々にミドリムシが健康をサポートするものだと思われ始めるまでに広まってきたのです。

一方、私自身にとっても、子供たちのリアルな声は、“もっと質の高いミドリムシの開発に取り組もう”“もっと研究を突きつめよう”と、奮い立たせてくれる原動力になりました」

次ページへ続く 

最先端の技術者こそ、 日本語を疎かにしてはいけない

ミドリムシの商用としての食品化は世界で初めての技術だが、こうした科学的な新技術によって発明されたものほど、共感してもらうための労を惜しんではいけない。それに、研究と同じくらいの情熱や熱意を傾けるべきだと出雲氏は言う。

「ミドリムシのことを正しく理解されずに誤解している人には“わかめや昆布と同じ海藻の仲間ですよ”と正しく説明をする。可能であれば研究所に来て見ていただく。小学校に理科の出前授業に出向く……。 “こんなことは知っていて当たり前”というのではなく、科学的なことをわかりやすくシンプルに徹底して伝える。子供、大人、研究者すべての人が理解して納得できる表現で伝えます。

優秀な研究者ほど得られる結果に注目しがちですが、そうした研究者ほどプロセスを大事にしてみたいはいかがでしょうか。私もそうでしたが、大学の研究室では伝える相手の多くは研究者であり、伝え方もフォーマットに基づいた論文やポスターセッション（研究発表の形式の一例）などが一般的です。だからといって、フォーマットに基づいたものばかり書いては、日本語の語彙力があまり広がらない気がします。ましてや、他人の共感を得ることは並大抵ではありませんから、表現力を磨くためにも、最先端技術の研究をする方こそ日本語の語彙力が必要ですし、『日本語検定』を受けるべきだと思います。

社会の第一線で活躍している人ほど、 洗練された日本語を使っている

出雲氏には文学好きの一面もある。特に好んで読んだという小説は世界最古の長編小説といわれる『源氏物語』。高校時代には原文を読破している。

「昨年、あるご縁で滋賀県の石山寺に参りました。石山寺は紫式部が『源氏物語』の着想を得たといわれる場所です。『源氏物語』や紫式部に関連する展覧会が数多く開催される『源氏の間』を拝観させていただき、貴主よりお寺の由来を通じて仏教のことを教わりました。

貴主の説明をお伺いしながら気づいたことがありました。それは社会の第一線で活躍されている方は『発信力』や『共感力』が高く、幅広い日本語のご教養をお持ちで、使用される日本語が非常に洗練されていることです。私もミドリムシへの共感を得るための説明では、その状況に合わせて最適な日本語を使うことを心がけています」

世の中には、“日本語を適切に使うことで共感を得られる領域がある”と考える出雲氏が挙げたのが最先端の科学に携わる研究者。それぞれの使う日本語によって伝わる情報が左右される場合があることも少なくないからこそ、とりわけ研究者には日本語力も磨くことに取り組んでみてほしいという。出雲氏が奨める『日本語検定』について、合格の結果も大事だが、語彙力や正しい日本語力が次第に身に付く学びの過程にも意味があると、その重要性を語っている。

(ライター 佐々木めぐみ)

ミドリムシで変えたい。
皆が口々に言う、輝きのない未来を。
そして乗り越えたい。
環境、食料、エネルギー問題というこの星の困難を。
僕らの意思は明確だ。
この無限の可能性を持った生物とともに
新しい未来をつくること。

ミドリムシ∞カンパニー
euglena

